

# フードシステム

## 生鮮果実と果汁の消費動向

果実消費量全体の動向については、本誌一九三号(二〇〇二年六月)の「統計の眼」で紹介したが、本稿ではその内実を生鮮果実と果汁に分けて分析する。

### 一、減少を続ける生鮮果実消費量

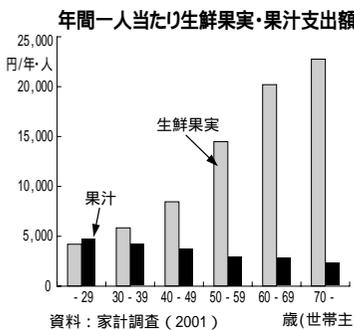
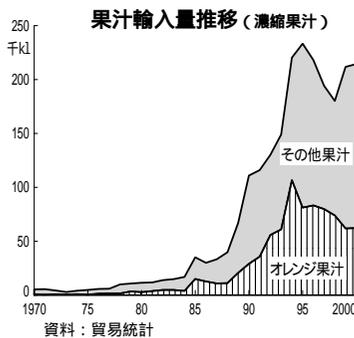
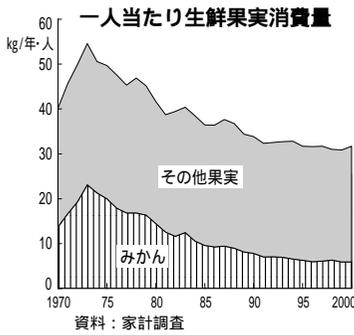
家計調査によると、二〇〇〇年の国民一人当たり生鮮果実消費量は三一・七kg/年であり、ピーク時の七三年(五四・六kg)に比べると四二%減少している。その最大の要因はみかんの消費量減少であり、二〇〇〇年のみかんの消費量は五・九kgでピーク時(七三年、二三・一kg)の約四分の一に減少している。みかん以外では、すいか(注)となつみかんが大きく減少し、なしもやや減少しているが、他の果実(バナナ、りんご、もも、いちご)の消費量はほぼ横ばいである。また、輸入品であるオレンジ、グレープフルーツも八〇年代末以降は横ばいで推移している。このように、生鮮果実の減少はみかん、なつみかん、すいかの消費量減少によるところが大きい。

ただし、家計調査は二人以上の世帯を対象とした調査であり単身者は除外されており、また外食は別の消費支出区分になっている。そのため単身者の増加や外食比率の増加による消費構造の変化は反映されていないことに留意する必要がある。

(注) 家計調査では、果実的野菜すいか、いちご、メロンも果実に入れている。

### 二、増加する果汁消費量

家計調査では、果汁(ジュース)については消費量の統計はなく支出金額がわかるだけである。それによると、二〇〇〇年の一人当たり果汁支出額は三、三三六円/年であり、一九八〇年に比べ一・八倍に増加している。生鮮果実支出額は(の間六%の増加)。単身者のほうが果汁消費量が多いこと、外食での果汁消費量が多くあること、輸入自由化等により果汁の価格は安定していたこと、等を考えると、果汁消費量は大きく増加したといえることができる。このことを供給面から見ると、国産果実のうち果汁に仕向けられた量は減少しているが(一九九九年でみかん二三万トン、りんご一四万トン、もも一三万トン)、果汁の輸入が急増し、二〇〇〇年の果汁輸入量は二一四千kl(濃縮果汁)で、八〇年の一九倍、九〇年の一・九倍になっており、果汁消費



の増大は輸入の増大に支えられてきた。三、年齢別の生鮮果実・果汁消費量 このように生鮮果実の消費量が減少し、果汁の消費量が増加してきたが、近年特に注目されているのが、年齢による果実消費量の違いである。

家計調査によると、世帯主二九歳以下の世帯の生鮮果実支出金額は年間一人当たり四、一七二円であるのに対し、世帯主が六〇〜六九歳の世帯は一人当たり二〇、一七〇円であり、五倍近い支出額である。逆に果汁については、前者が四、七〇三元で後者(二、二七八円)の二倍以上である。図で示したように、生鮮果実は年齢が高いほど消費量が多く、果汁は逆になっている。問題は、現在の若い世代が年齢を重ねるにしたがって果実を多く消費するようになるのか、あるいはそのまま生鮮果実の消費量が減ってしまうのか、ということである。いずれにせよ果実消費の拡大を促す方策が必要であろう。(清水徹朗)